

# 天然——日本の自然

白幡洋三郎

天然という言葉は、ずいぶん死語の領域に追いやられてはいまいか。天然ガスや天然ゴムなど自然界から得られる物質が有用・高品質なものとして「天然」を冠して評価されてはいる。とはいえ、工業的に生産される都市ガスや合成ゴムが低い評価を受けているわけではない。むしろ、天然を含む熟語は天然痘、天然ぼけ、など有り難くない、はばかれるような事象についての用語がしぶとく生き残っているようなのだ。天然記念物とは自然が創り出した奇岩や途方もない長寿を誇る古木など、人手では創れないものを評価する言葉であったのに、近年は厄介者や困った人物を指すのに使われたりする。「養殖」魚に対する「天然」もののように、天然の高評価を支えている例もなくはないが、「自然食品」や「自然にやさしい」など、自然の方が天然に比べると断然高く評価される例が増えているようなのだ。がしかし、かつて天然が光り輝いていた時代があった。

私が物心ついた頃、はじめて遭遇した「天然」との出会いは「総天然色」体験とでも名付けられようか。子供たちも含めて日本人の多くが、総天然色を売りにした映画に魅了されていた時代があった。人知が創り上げた、当時最高の品質のカラー映画の宣伝文句が「総天然色」だった。高度な技術的達成により人工的につくられた最高のカラー映像作品を指して「天然」の名が与えられたのである。

「総天然色」の言葉が映画宣伝に使われた最初は、ディズニー動画の「白雪姫」だという。この作品がアメリカで制作されたのは1937年。カラー化は新技術「テクニカラー」方式によるものだった。戦後日本でようやく公開されたテクニカラー映画「白雪姫」に「総天然色」のキャッチコピーをつけた担当者の翻訳センスはすごい。訳語の「天然色」に反してもとの言葉が、意味上では正反対の「テクニカラー（人工色）」であったのだから。

アメリカでは「テクニカラー」であっても、日本人観客に向けては「天然色」だ。さらに「総」をつけた総天然色は、混ぜ物のない、ナチュラルの極限を思わせる。…… 関係者がそう考えたかどうかはわからないが、ともかく天然とは混じりけのないホンモノを代表していた。

本書は異邦人の目に自然なもの＝天然と映ったであろう日本の景観を集めたものである。描かれているのは、山岳、溪谷、滝などの地形、船の時代を反映して、岬、入り江、断崖など海岸地形も多い。さらに、台

風、洪水、噴火、吹雪など自然の暴威や災害、逆に満月や朝日・夕日、霞など季節の穏やかな循環に伴う自然現象、また動植物や魚介・昆虫など。

収録された風景画像の特徴は、自然だけからなる景観ではなく、人の姿や人がつくった橋や建物などが頻繁に姿を現すことである。つまり異邦人たちが目を奪われ、魅了させられた日本の風景は、じつは多くがすでに人の関与を受け入れた「自然」なのであった。近年もてはやされている「里山」も、これに連なる例である。

本書に載る1枚に、小笠原諸島の密林の図がある(図版89)。この図は、写真をもとに製版された銅版図であろう。もとの写真は日本列島の景観を写した世界最初の写真(ペリー艦隊乗組員による)と思われる。小笠原諸島の植生景観(手つかずの原生林=天然林であろうか)を撮影した最古の写真としても貴重である。

この小文において、無理を承知で「自然」と「天然」をいささか強引に区別しようとしている。そのわけは、日本人にとってnatureの訳語として明治以来広く普及・定着した日本の「自然」は、各国語がもっているもともとの「天然」=「手つかずの自然」を意味する範囲を超えていること。ずいぶん人間の側に近寄った「自然」であろうこと、を確かめたいからである。

異邦人の目に自然なもの=天然と映ったであろう日本の景観、それも19世紀の書物に掲載された画像という限定付きであるが、その中には人間の姿がそこかしこに現れる。異邦人のまなざしが nature と捉え

た景観は、よく見れば人間の関与が見事に刻み込まれている、人手の加わった景観なのであった。

収録した山の画像には、視界を大きく支配する山の雄大な姿や煙を噴く活火山、激しい噴火図、などがある。一方で、山中の景観には頼りなげなあばら屋、あるいはのぞき込むのも恐ろしい深い渓谷に架けられた危なっかしい吊り橋、また切り立った断崖絶壁の上に立つ人家や祠などがよく現れる。それは人と自然の両者が共に造り上げた景観であって、天然そのものではない。しかし限りなく人間がちっぽけに見える、天然景観の雄姿ではないか。一方、通る人もないはずの山の尾根に列を作って登る巡礼者（修験者）が描かれた画像がある。天然の片隅にか細いが着実に歩む道を刻みつけている人たちの姿である。

「日本の自然」という言い方がふつうによく使われる。そのときの「自然」とは、人間の関与が少ないことを意味するが、実際は多くの人為を含んでいることがある。異邦人の目に日本の天然と映ったものは人工の反対側の極にある天然、手つかずの自然ではなく、時には大いに人為を含んだ多様で人間くさい「自然」なのである。